

福岡県西方沖地震で被災した玄界島住民の帰島後の復興評価と しまづくりに関する調査

長崎大学工学部 学生会員○山下龍志
長崎大学工学部 正 会 員 中村聖三

長崎大学工学部 フェロー 高橋和雄
長崎大学工学部 学生会員 秋吉大輔

1. はじめに

平成 17 年 3 月 20 日に発生した福岡県西方沖地震により、震源に最も近かった玄界島では斜面地の住宅と宅地が甚大な被害を受けた。そこで、斜面地の一体的な整備が必要と考えた島民の意向を反映した復興計画をもとに、福岡市を事業主体とする小規模住宅地区改良を活用した事業が導入された。平成 20 年 3 月の市営住宅の完成を最後に避難生活は解消され、現在は島での生活が再開された。玄界島ではコミュニティの減少、島の活性化、少子高齢化など多くの問題を抱えているが、住宅再建が優先されたため問題解決に向けての具体的な動きはない。そこで、本研究では、島での生活が再開された住民を対象に復興事業の評価や玄界島の将来についてなどのアンケート調査を行い、生活環境の改善やしまづくりを検討する。さらに、平成 18 年 1 月、平成 18 年 12 月および平成 19 年 12 月に実施したアンケート結果¹⁾と比較する。

2. 玄界島住民の復興としまづくりに関するアンケート調査

平成 20 年 12 月に玄界島の新築の戸建て住宅(47 戸)、県営住宅(50 戸)、市営住宅(65 戸)および旧戸建て住宅(7 戸)、旧市営住宅(20 戸)を対象としアンケート調査を行った。アンケート調査票の配布・回収は戸別訪問し、原則として手渡しで配布・回収を行った。不在の世帯には郵送を依頼した。アンケート調査表は 175 部を配布し、136 部回収した(回収率 77.7%)。

(1) 現在の状況 震災から 4 年近く経ち、島での生活が再開された住民に、「島内の人達との付き合いは、地震前と比べて変化したと感じますか」と聞いたところ、図 - 1 のように「地震前よりも、増えたように感じる」の割合は去年まで年々増加傾向にあったが、今年は極端に減っているのがわかる。

また、「震災前と比べて近所への外出の機会はどうですか」と聞いたところ、「増えた」3.8%、「変わらない」34.6%、「減った」61.7%となり、半数以上の人が出外する機会は少なくなったと答えた。さらに「震災以前と同じような生活に戻ったと思いますか」という質問に対して、「思わない」が 60.4%という結果であった。

帰島後は外出の機会が減少し、避難中に比べ島民同士の交流は減っており、住宅は再建されてもコミュニティは回復していないことがわかる。

(2) 復興の評価 「復興計画を全体的に見てどう評価しますか」と聞いたところ、「大いに満足できる」12.6%、「ほぼ満足できる」57.5%、「やや不満である」24.4%、「かなり不満である」5.5%となり、去年より評価は若干上がったもののほぼこれまでと同じ結果であった。そこで「復旧・復興事業で新しく完成した施設をどの程度利用していますか」と聞いたところ表 - 1 のようになり、利用状況が良いとは言えないことがわかる。ここで「もやい車」とは玄界島で管理されている共同で利用できる荷物運搬車である。

また「新しく整備された地区にさらに必要なものはありますか」と聞いたところ図 - 2 のような結果となり、特に「公園内のトイレ」は多くの人が必要だと考えていることがわかる。新設の公園が利用しづらい原

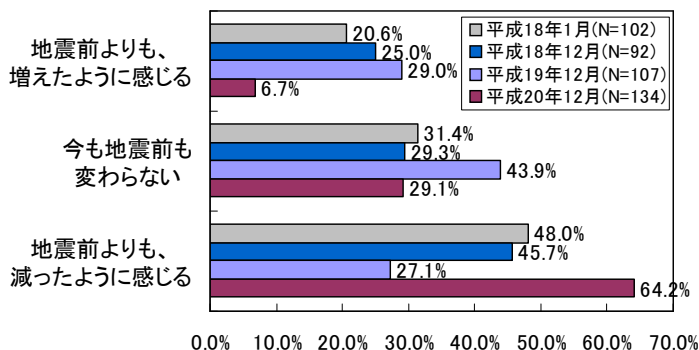


図 - 1 島内での付き合いの変化

表 - 1 新しい施設の利用状況

	よく利用 する	ときどき 利用する	ほとんど 利用しない	利用した ことがない
公園(N=122)	5.7%	30.3%	34.4%	29.5%
もやい車(N=120)	0.8%	4.2%	25.0%	70.0%
集会所(N=121)	2.5%	33.3%	38.3%	25.8%
老人いこいの家(N=121)	2.5%	25.0%	18.3%	54.2%

因のひとつであると考えられる。ほかにも「スポーツ施設」の意見も多く、ゲートボール場に代えて若い人たちが利用できるグラウンドや球技ができる屋内の施設も必要とされており、これはコミュニティの回復などにも期待できる。

復興事業に対して個別にはそれなりの評価はされているものの、活用されていないものもあり、これらをもっと使いやすくする工夫が必要である。うまく活用することはコミュニティの回復など問題解決へ役立つことが期待される。

(3) 今後のしまづくり 復興事業もほぼ終わり、「玄界島復興対策検討委員会」に代わり、玄界島のしまづくりに関して議論する「玄界島振興委員会」の設置が決まった。

玄界島には観光客受け入れ施設として、震災前に旅館や物販所などがあったが、震災後はなくなり、現在受け入れ施設はない状態である。旅館は食事会や冠婚葬祭を行うなど、島民が集まる場でもあった。このような受け入れ施設不足は現在玄界島が抱える大きな問題のひとつである。

そこで「玄界島振興委員会で具体的に議論してほしいことはなんですか」（複数回答）と聞いたところ、「民宿、ペンションなどの宿泊施設」が 97.2%と圧倒的に多かった。他にも「わかめなどの地元の特産品の製造」、「食堂」などが多くの人から支持されており、以前あった施設の再建を望む声が目立った。

また振興委員会で議論すべき大きな問題のひとつとして、新しい小中学校が建設された後の中学校跡地の利用方法である。「中学校跡地はどのような活用が望ましいですか」と質問したところ、図-3のように「民宿、ペンションなどの宿泊施設」が多く、

「地震の記録、震災のパネル、被災鳥居などの展示」の震災跡を保存する施設として活用する意見も多かった。

跡地が人里から少し離れた高台にあるために、アクセスが悪いのと維持費も掛かるので「活用しない」という意見もあった。

しまづくりにおいてまずは観光客の受け入れ施設を整え、同時に雇用の場を確保するなど環境整備が重要である。そのために中学校跡地の活用や、新設された集会所、公園および旧来からの公民館などの施設を利用しうまく活用するなどして、島民主体で行えるしまづくりを目指すことが、コミュニティの回復や島の活性化に繋がる。

3. まとめ

回復しつつあると思われたコミュニティも実際は減っており、しまづくりについて真剣に考えてはいるが具体的に動きだせていないのが現状である。このような現状を改善するには島民主体でしまづくりを話し合う場を早く設けて、島民同士の交流の増大や島の活性化を図っていくことが重要である。

参考文献

- 1) 田辺寿彬, 高橋和雄, 中村聖三, 寺島健太: 福岡県西方沖地震で被災した玄界島住民の復興としまづくりに関する調査, 平成 19 年度土木学会西部支部研究発表会概要集IV部, pp.693~694, 2008.3.

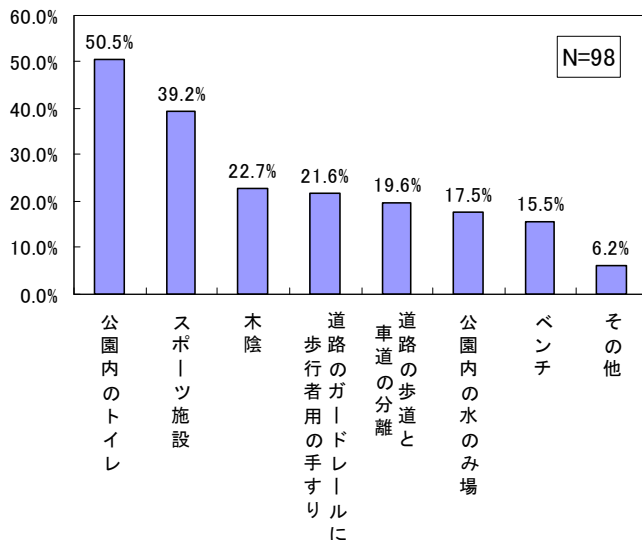


図-2 島民が必要と考える施設（複数回答）

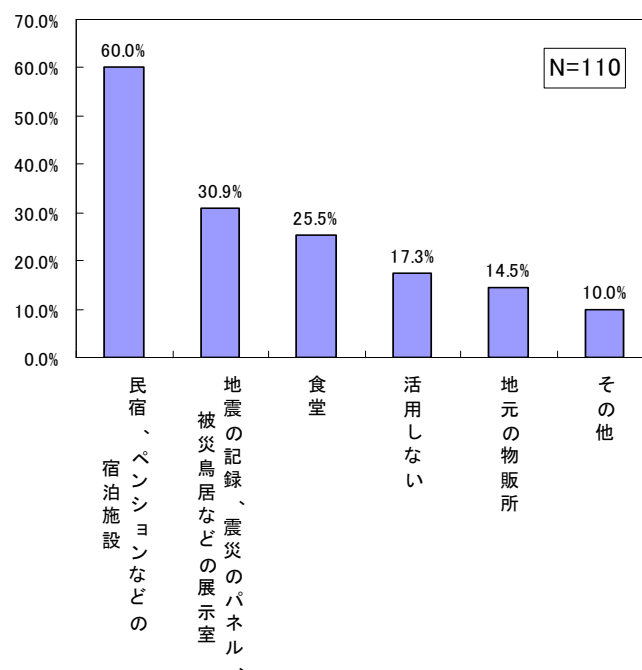


図-3 中学校跡地の利用方法（複数回答）